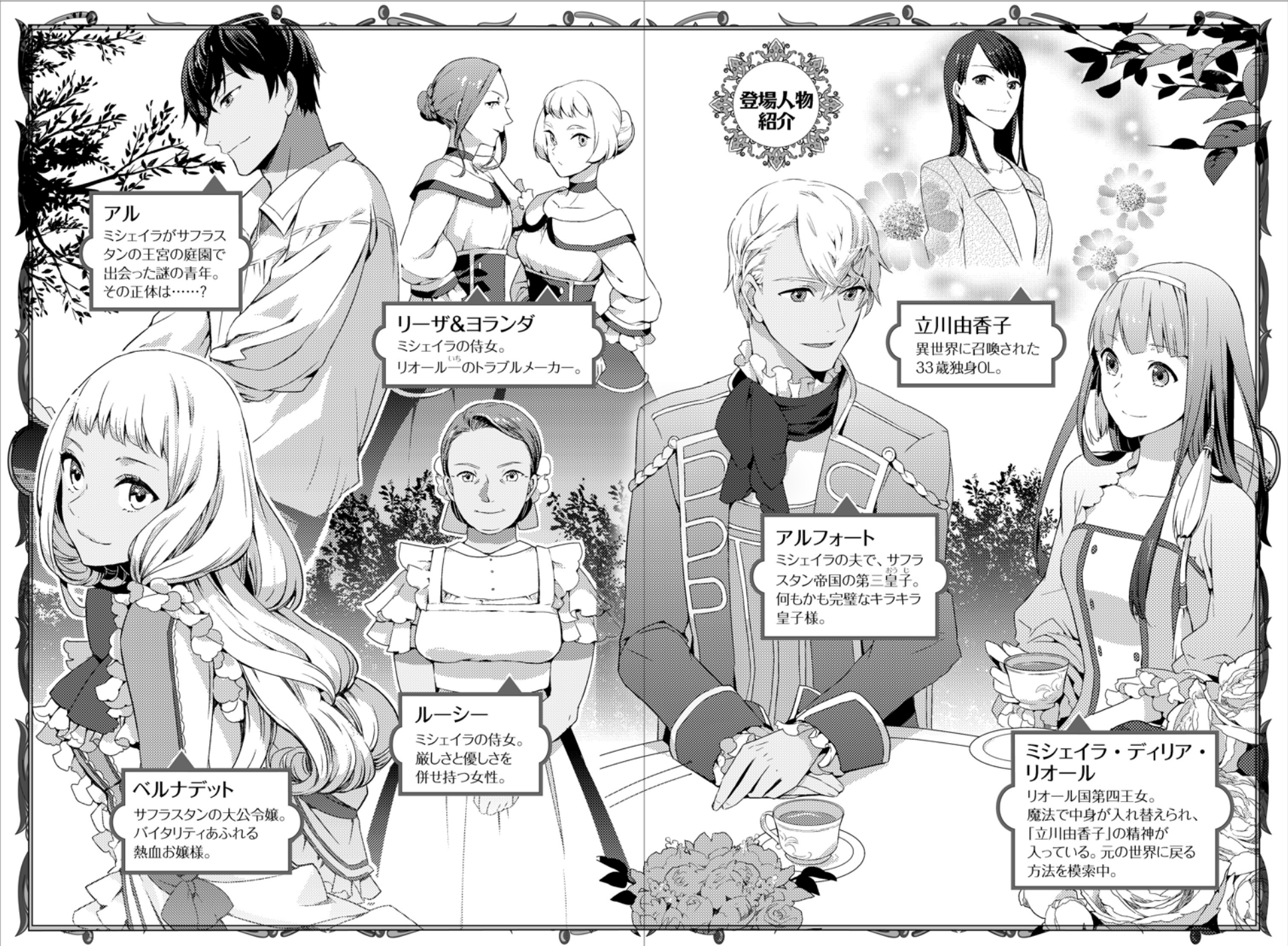
入れ代わりのその果てに４


登場人物紹介
アル
ミシェイラがサフラスタンの王宮の庭園で出会った謎の青年。その正体は……？
リーザ&ヨランダ
ミシェイラの侍女。リオール一のトラブルメーカー。
立川由香子
異世界に召喚された33歳独身OL。
アルフォート
ミシェイラの夫で、サフラスタン帝国の第三皇子。何もかも完璧なキラキラ皇子様。
ルーシー
ミシェイラの侍女。厳しさと優しさを併せ持つ女性。
ベルナデット
サフラスタンの大公令嬢。バイタリティあふれる熱血お嬢様。
ミシェイラ・ディリア・リオール
リオール国第四王女。魔法で中身が入れ替えられ、「立川由香子」の精神が入っている。元の世界に戻る方法を模索中。

プロローグ

深夜、サフラスタン帝国の宮殿にほど近い屋敷から、火の手が上がった。炎が夜空を赤く染め、近隣の住民を不安にさせる。

その屋敷には武装集団が押し寄せ、警護の騎士達と衝突していた。地上もまた、両者の血で赤く染められようとしている。

屋敷の主である大公の令嬢ベルナデットは、自室で眠っていたところを侍女に起こされた。彼女はネグリジェの上にガウンを羽織(はお)ると、侍女が止めるのを無視して部屋から飛び出す。

彼女を安全な場所に連れ出すため部屋の外に待機していた騎士達が、それを慌てて追いかけた。

「ベルナデット様、お待ちください！　そちらは危険です!!」

彼等を振り切り、彼女は騒ぎの中心へ向かう。

ベルナデットに避難する意思は欠片(かけら)もなかった。

民や国土を守るのが皇族としての務めであり、義務である。国家にとって、いわば生きた兵器のような存在なのだ。それに彼女には、順位は低いが帝位継承権がある。ここで逃げるなど言語道断。彼女はそう考えていた。

大公の屋敷では、魔法が使えないようになっている。だが大公一家と一部の使用人だけは使う事が出来るので、彼女は自分なら戦力になれると考えた。
二階の廊下から、吹き抜けになった玄関ホールを見下ろす。そこが騒動の中心であり、襲撃者達と警護の者達が激しくぶつかり合っていた。
庭園の作業小屋が燃やされ、窓や玄関から赤い光が差し込んでいる。だがそれ以外に明かりはなく、敵味方を判別するのが困難だった。
暗いぶん聴覚が研ぎ澄まされているのか、罵声や悲鳴、武器と武器がぶつかり合う音が、ベルナデットの耳に嫌に大きく響く。
彼女は怖じ気づく自分を奮い立たせ、震える足で一歩踏み出した。
その時、辺りが急に明るくなった。ホールで戦っていた人物の一人が、魔法を使い明かりを灯したのだ。
明るくなったことで恐怖感が薄れる。だが、その場の惨状が明らかとなり、ベルナデットは更に動揺した。
落ち着けと自分に言い聞かせながら辺りを見渡した彼女は、明かりを灯したのが父の側近の一人であることに気付く。父の信が厚く、ベルナデットも親しくしている人物だ。彼は魔法を使った隙を突かれて、今にも敵の攻撃を受けようとしていた。
ベルナデットはとっさに攻撃魔法を放つ。家の中であるという意識がかろうじてあったため、得意の火系ではなく風系の術を選び、短縮呪文を唱えた。

短縮呪文は高度な技なので制御が難しい。激しく動揺していた事もあり、思わぬ威力が出てしまった。敵だけを攻撃するつもりだったのに、近くにいた味方まで巻き込んでしまったのだ。
幸い、巻き込まれた味方に大した怪我はないようだ。だがベルナデットは思わぬ失態に青ざめ、しばし呆然とする。
「ベルナデット！」
突然階下から自分を呼ぶ父の声がして、彼女は我に返った。
それと同時に、敵がすぐ近くに迫っていることに気付く。
敵は目をぎらつかせ、すでに剣を振りかぶっていた。
自分の危機を目前にして、ベルナデットは息を呑んで固まる。
「お逃げください、ベルナデット様！」
追いかけてきた騎士の一人が声を上げたが、彼女は動けない。舌が口腔に貼り付き、呪文も唱えられなかった。
その時、階下から手すりの間を通って無数の氷の刃が飛んでくる。眼前をかすめたそれに驚き、ベルナデットは思わず尻もちをついてしまった。
彼女に斬りかからんとしていた敵の身体に、鋭い氷の刃が次々と突き刺さり、皮膚を無残に切り裂いていく。
「がっ……！」
短い苦悶の声を上げた敵は、血を噴き出しながら吹き飛ぶ。そのままの勢いで床に叩き付けられ

たあと、ピクリとも動かなくなった。
ひとまず危機は去ったが、ベルナデットは少しも安心できなかった。
魔法の主を確認するべく、階下を見下ろす。そこには大公である父がいた。
父の姿を目にし、彼女の身体からようやく力が抜けた。
護衛の騎士達が彼女に駆け寄って声をかける。
「お怪我はありませんか⁉」
「ありません」
ベルナデットは答えながら、震える足で立ち上がった。
「さあ、避難いたしましょう」
「逃げる気はありません。ここで、わたくしも戦います」
声を震わせながらも、彼女は言い切った。
「なりません」
護衛の騎士達はきっぱりと言う。
ベルナデットはムッとし、彼等を無視してホールに下りようとしたが、すぐに足を止めた。
足早に階段を上ってきた父の姿を認めたためだ。
「ベルナデット、戦闘への参加は許可しない。即刻避難するように」
父――否、大公は厳然と命じた。
「なぜですの⁉　わたくしの力は役に立つはずですわ」

彼女は強がってみせたが、大公は冷たく言い放つ。
「足手まといは不要だ」
その言葉に、ベルナデットは反論できなかった。足手まといという自覚は、確かにあったのだ。
助けられるばかりで役に立っているとは言いがたい。むしろ味方に被害まで出している。
彼女は絞り出すように言う。
「……ご命令に従います」
「彼等に脱出の手引きを頼んである。行きなさい」
今度は逆らう事なく父の言葉に従った。
ベルナデットは騎士達に囲まれながら戦線から離脱し、ひと気のない廊下を進んで裏口へ向かう。
そして用意された馬車に乗り込み、無事に屋敷から脱出した。
遠ざかっていく屋敷を眺め、足手まといと断言された悔しさに、彼女は唇を噛む。
だが同時に、戦場から脱したことに安堵してもいた。

ベルナデットの後ろ姿を見送りながら、大公の側近が問いかけた。
「あのような厳しい言葉をかけてしまってよろしいのですか」
「足手まといは本当の事だろう？」
大公はそっけなく答える。
そして彼は魔法の使用は最低限にとどめ、主に剣による物理攻撃で敵を倒していく。魔法を乱発

していては、魔力を使っている人間が探しにくくなるからだ。
敵側には必ず、魔法を使って、離れた場所から送られる指示を受け取っている者がいる。屋敷内では魔法が使えないので、外にいるのだろう。だが、屋敷内で戦う仲間に指示を伝えるため、この近くにはいると思われる。その者の魔力を探知して動きを追えば、裏で糸を引く人物や、今回の襲撃に加わっていない仲間達にたどり着くはずだ。
「不器用な方だ」
独り言のような側近のつぶやきに、大公は小さく肩をすくめた。
大公はベルナデットに対して、わざと辛辣な言葉を用いた。そうでもしなければ、彼女は決して引かないと知っていたからだ。
ベルナデットには伏せていたが、大公はこの襲撃を予想して、作戦を立てていた。屋敷内にいた大公やベルナデットは、いわば囮だった。
帝位継承権を持つ人間として、ベルナデットには作戦に参加する権利があるし、その義務がある。本人が避難を拒否するのなら、なおさらその意思を尊重すべきだ。
だが、大公が作戦を秘密にしていた事からわかるように、彼はベルナデットをこの作戦に巻き込む気はなかった。
王族や皇族の務めは、先頭に立ち敵を屠ること。時にはやむを得ず、味方を犠牲にしなくてはならない事さえある。
大公は人の命を奪う苦痛を娘に味わわせたくなかった。出来れば危険な目にも遭わせたくない。

だからこそ、厳しい言葉でもって彼女を退けたのだ。
「魔力探知による逃亡者の追跡は進んでいるか」
大公の問いに、側近は手短かに返す。
「予定通り進行しています。屋敷の付近に潜ませた者達からも、順次捕縛完了の報告が上がっています」
「そうか」
サフラスタン帝国は少し前に、第三皇子の妃としてリオールという国から王女を迎え入れた。
リオールは大陸の北限にある小国だが、優れた医療技術を持ち、世界中に医師団を派遣している。医師団は紛争地帯や被災地を巡って支援活動をしており、各国にとって欠かせない存在だ。
そんな国との繋がりは、サフラスタン帝国に様々な恩恵をもたらすと予想されている。医師団が優先的に派遣されたり、医療を学ぶ留学生の受け入れ枠が増えたりするだろう。
サフラスタン帝国と敵対関係にあるサタレンという王国は、この二国の結びつきを大きな脅威と見ていた。このままでは、いずれサタレンへの医師団の派遣回数が減らされるか、派遣自体がなくなるのではないか。もし戦争になればサフラスタンのみに医療部隊が派遣され、サタレンには派遣されないのではないかと、そんな恐れを抱いていたのだ。
だから婚約が発表された時から、撤回しなければ攻撃すると再三にわたって警告していた。
だがサフラスタン帝国は、それを無視して式を執り行った。
結果、サタレン上層部は実力行使に出た。今回の結婚に対して、武力をもって抗議しているのだ。

「中立国のリオールが我が国にのみ与することなどありえぬというのに、愚かな事だ」
大公は吐き捨てるように言った。
「周辺の被害状況はどうなっている」
「現在のところ被害報告は入っていません。また、マークしていた工作員達は、全てこの襲撃に関わっていることが確認されています。国内の協力者をあぶりだすため、一部の工作員は泳がせたまま、監視を継続しております」
側近は淡々と報告した。
サフラスタンの上層部はサタレンの不穏な行動を十分に把握していた。怪しげな者達が帝都に流入してきたのを確認しており、近いうちに何らかの行動を起こすだろうと予想していたのだ。
宮殿や他の皇族が住まう屋敷、または国の重要施設などが標的とならないよう、大公はあえて屋敷の警備を緩めていた。そして狙い通り、大公家が襲撃されることとなった。
筋書き通りに事は運んでいる。ただ一つ、ベルナデットの行動を除いては。

一　騒乱

夜半過ぎ、ミシェイラこと、あたし――立川由香子は馬車で運ばれていた。
いきなり宮殿に行きますよと言われて、問答無用で放り込まれたのだ。
かろうじて着替える時間はもらえたが、寝巻きよりはマシな部屋着に、髪は軽く括っているだけというありえないラフさだ。ブラジャー代わりのコルセットも着けていないので、ガウンを羽織って誤魔化している。当然、化粧もしていないし、とても人前になんて出られる格好じゃない。
馬車は今まで経験した事のない速度で疾走している。操縦も荒っぽいため、乗り心地は最悪だ。スプリングの利いていない乗り物がこれほど不快なものだなんて、初めて知った。
ひっきりなしに跳ねる座席に何度も打ち付けられて、お尻が痛くなってくる。横揺れもひどく、今にも馬車から放り出されてしまいそうだ。あたしは窓枠を掴み、必死で耐えている。
そもそも、あたしは何だってこんな目に遭っているのか。
まずはこれまでの経緯を振り返っておこう。
元々あたしは、この世界の生まれではない。別の世界から、ある日突然召喚されたのだ。
あたしを召喚したのは、リオールという国の王様だ。

第四王女であるミシェイラ姫が亡くなり、サフラスタンという国へ嫁ぐことになっていた彼女の身代わりとして、あたしを召喚したのだ。

あたしとミシェイラ姫は同じ本質を持つ人間であり、互いに「異なる世界に生まれたもう一人の自分」という存在だったので、中身だけをそっくりそのまま入れ替えることが可能だったという。その結果、黒目黒髪に黄みがかった肌という典型的な日本人の特徴をもっていたあたしは、深い緑色の髪と同系色の目、抜けるような白い肌へと大変身を遂げていた。

考えてみてほしい。「召喚しました、身代わりになってください」と言われて、すぐに納得できるだろうか？　普通はできないだろう。あたしだって納得できなかった。だから自力で帰還を果たすべく、そのための魔法を研究したのだ。……結局、失敗したわけだが。

帰還魔法が完成したのはお相手の国に着いた後。しかも式の直前のことだった。あたしは喜び勇んで元の世界に帰ろうとしたけど、術を発動させる事は出来なかった。

この世界では宮殿のような公的な場所において、魔法の使用が制限されているからだ。最初にそう聞かされていたはずなのに、あたしはそれをすっかり失念していた。

結婚式に備えて常よりもガッチガチに警護された宮殿を抜け、魔法の使える場所まで忍んで行くなんてとても不可能で、あたしはそのまま結婚式を挙げることになった。

結婚後は、それまで滞在していた宮殿を出て、お相手の屋敷で暮らし始めた。だから完成させた魔法でいつでも帰還できる……はずが、そうはいかなかった。なんと、研究資料を全て没収されてしまい、研究自体も一からやり直しになってしまったのだ。

理由は至極単純で、お相手の国へ魔術書を持ち込むには手続きが必要だったらしい。

しかもこの時、移動や時間に関連する術は、そういった魔法への適性がないと使えないらしいことがわかった。

あたしの適性は治癒のみだ。嘘か本当かは試してみないとわからないけど、その情報が正しければ、自力での帰還は不可能ということ。足掻けば足掻くほど、帰還が遠ざかっているような気がする。

せめてもの救いは、嫁いだ相手が決して悪い人じゃなかったことだ。完全な政略結婚なのに、望外なほどに良くしてくれている。

おかげで小さな不満は多々あれど、これまで日常生活を送る中で不安など欠片も抱くことはなかったのだが……

あたしは馬車の窓枠に縋り付き、必死に耐えていた。

この情けない格好を結婚相手であるアルフォート皇子に見られずに済んでいることは、不幸中の幸いと言える。

いつもは馬車に同乗する彼は、護衛の騎士達と共に騎馬で並走していた。

だから彼の代わりに中年の侍女、ルーシーが馬車に乗っている。彼女は厳しそうな、キリッとした面差しの女性だ。見た目通り厳しい一面もあるけれど、気配り上手な優しい人でもある。そんな彼女なら、これは不可抗力だと、見て見ぬ振りをしてくれるだろう。

普段は宮殿へ出かける際に侍女を伴う事はない。今日は彼女が付き添っているという状況からして、どれだけ異常事態かわかろうというものだ。
宮殿の正門前で馬車が停まった時は、ようやく着いたとホッとした。
だが遅い時間にもかかわらず、正門には明かりが煌々と灯され、フル装備の衛兵が何人もいた。どことなくピリピリした空気が漂っており、あたし達が門の方へ進み出ると彼等の警戒が一気に高まった。そんな反応をされると、嫌でも緊張してくる。
衛兵達は先頭の騎士達と何か言葉を交わすとわずかに警戒を緩め、門を開けてくれた。大した検問もなく通してもらえたのは、一行の中にいる皇子がもつ威光のおかげだろうか。
宮殿の敷地内に入ると、庭園のそこかしこに明かりが灯され、兵が慌ただしく行きかっていた。彼等はあたし達一行とすれ違うたび、鋭い視線を向けてくる。
気分の良いものではないが、それだけ事態は逼迫しているのだろう。
「ルーシー、一体何が起こっているのです？」
あたしは思わずそう口にしていた。
「わたくしからは何とも……申し訳ございません」
予想通りの返答だ。もしここで答えられるのであれば、最初から説明してくれていたはず。それをしなかったという事は、そもそもルーシーが理由を知らされていないか、知っていても話してはならないと命じられているからだろう。
「ただの独り言です。忘れてください」

そう言いつつ、あたしは窓の外に視線を戻した。そして騎馬隊の先頭付近にいる、夫の背を恨めしげに眺めた。アルフォートは一人だけ身に着けている物が違うから、すぐに識別できる。
何も知らされていないあたしは、ただ不安が募っていくばかり。国家機密などもあるだろうが、こうして付き合わされている以上、あたしも当事者の一人。たとえ何も出来なくたって、少しは状況を教えてくれたっていいんじゃないか？
一行は、更に奥へと進んでいく。どうやら、皇族の居住空間や賓客を泊めるための施設がある、奥宮を目指しているようだ。
宮殿へはアルフォートの付き添いで何度も訪れているが、本宮までしか入らない。奥宮へ入るのは婚礼前の滞在期間以来だ。
もしやこんなラフな格好で、皇族の方々の前に出なければいけないのか？
あたしは暗澹たる気分になった。
腹立たしいことに、アルフォートはちゃんとした服を身につけている。おかげであたしの服装のだらしなさが一層際立ってしまうじゃないか！
そんな事を考えながら夫の背を睨んでいたら、急に彼だけ方向を変えて一行から離れていった。一体どこへ行くんだろう？
アルフォートが向かっているのは右殿舎のようだ。そこには何があっただろうかと、記憶を探る。
真っ先に思い出したのは、医療棟の存在。リオールから一緒に来てもらった侍女のダニエラとユリアーネが入院しており、右殿舎の中では最もなじみのある施設だ。

だがこんな緊迫した中で誰かを見舞うということもないだろうし、怪我や病気をしている様子もない。だから、そこが目的地とは考えにくい。他には何があっただろうか？

右殿舎には、主に軍事関連の施設が集まっている。軍馬の厩舎や訓練施設、兵の宿舎などだ。後は……軍の司令室もあるんだったか。それに思い至って、あたしは納得した。

軍はアルフォートの統括下にある。何か問題が起きたなら、指揮官として駆けつけるのは当たり前だ。夜中であろうと明け方であろうと関係ない。

……けど、あたしは？　どうしてあたしまで連れ出されているんだろうか？

理解不能な事ばかりで、感情の遣り場がない。到着したらアルフォートから説明があるだろうと思っていたが、それも怪しくなってきたし、そろそろ癇癪を起こしてもいいような気がしてきた。

やがて一つの宮の前で馬車は停止した。案内された宮の内部には、夜更けだというのに大勢の人間がいた。その中心では、寝巻きの上にガウンを羽織っただけという格好の皇后様が、忙しなく指示を出している。

皇后様の傍らには、皇太子妃のリディアーヌが立っていた。だが彼女は呆然とするばかりで、現状を理解しているようには見えない。

その二人の周りを侍従らしき人達がせかせかと行きかっていて、壁際にはたくさんの騎士達が立ち並んでいた。

あたしは屋敷から付き添ってきた騎士達にがっちり取り囲まれているので、隙間からはそれぐらいしか見えなかった。が、ひどく物々しい雰囲気だけは察する事が出来た。

そんな胃が痛くなりそうな空気の中、案内人に導かれるまま進んで行く。忙しなく立ち働いていた宮殿の侍女達が椅子を用意してくれたので、それに腰掛ける。

接待役の侍女達だけは甲斐甲斐しくお世話してくれたが、他は誰も何も話しかけてこない。皆、あたしになど構っていられないようだ。嫌味や嫌がらせがないのは結構だが、こうも完全に無視されると、それはそれで寂しい。

皇后様は相変わらず忙しそうで近寄れないし、リディアーヌ妃は……あたし並に何もわかっていなさそうだ。他に答えをくれそうな人は見当たらない。今は大人しくしておいた方が無難だろう。

それでも何か情報が得られないかと、周りをさりげなく観察する。

すると、少し離れたところでポツンと椅子に腰掛けているベルナデットを見つけた。何やら意気消沈した様子で俯いている。常に元気で勝気な彼女しか見たことがないあたしは我が目を疑った。

一体何があったのだろうかと見ていたら、彼女もあたしの存在に気付いたようで、椅子から立ち上がり歩み寄って来た。

座ったまま待っているのも失礼なので、あたしも椅子から立ち上がる。

ベルナデットはあたし以上にラフな格好をしていた。羽織っているガウンの下は寝巻きのままで、髪も結っていない。

更に近づいてよく見れば、ガウンは煤けているようだ。ピンク色の髪も白っぽくなっているし、顔には擦りむいた痕がある。どうやら、彼女の身に何かがあったらしい。

だが、こんな状態のベルナデットにそれを聞くのは躊躇われた。下手な事を言って、あたしが恥

をかくだけならいいけど、彼女を傷つけてしまいかねないからだ。
困ったなと思いつつも、あたしはいつも通りにこやかな表情を浮かべる。
「ミシェイラ様、来てくださったのですね」
そう言ったベルナデットの表情は強張っており、明らかに無理をしているのがわかった。
「ベルナデット、顔色がよろしくないですわ。椅子に腰を下ろして休まれた方が良いかと」
「そんなにひどい顔をしておりますか？」
ベルナデットは自嘲気味に訊ねてきた。
「ひどく疲弊しておいでのようですわ」
あたしはやんわりと返す。人を労わるのってすごく難しいと改めて思った。
「色々ありましたから、平静を保つだけでやっとですの」
その色々って結局何なのさ⁉
大変でしたのね……なんて無難に返したけど、このあと何を話せばいいのやら。
あたしは少し考えて、口を開いた。
「少々失礼しますね」
そう言って、ベルナデットの顔に手を伸ばす。
皮が少しめくれている程度で血は出ていないが、場所が顔だけにすごく目立つ。これが腕白小僧とかだったら、元気の証だと微笑ましく思うだけだが、ベルナデットは立派なレディだ。せめて表面だけでも治療しておこう。もしかしたら、数日後に青痣が浮かび上がってくるかもしれないけど、

その時はまた考えればいい。
医務室で治療する時と違い、この場所は魔法の使用が制限されているためか、術を発動させるのに少々苦労する。だが、傷は何とか消えてくれた。これで良しと、あたしは一人頷く。
「ありがとうございます」
先程よりも少し柔らかな笑みを浮かべて、ベルナデットは言った。
「治していただいたわたくしが言うのも何ですが、みだりに人前でお力を使ってはなりません。妃殿下のお力を利用しようとする者が現れないとも限りませんから」
「はい」
便利だからって、乱発しちゃダメよってことだよね。ごもっともです。
「それに……」
ベルナデットはあたしの背後を見やって言葉を濁した。
「それに？」
あたしは首を傾げて聞いたが、彼女は答えない。
不審に思ったあたしは、背後を振り返った。
するとズンズンと大股で向かってくる皇后様の姿が目に入った。彼女の視線は、あたしにロックオンされている。その険しい表情から、ご機嫌麗しくないことがはっきりと感じ取れ、冷や汗が出てきた。
あたし、何か怒られるような事した⁉

「ミシェイラ妃」
静かながら迫力のある声音で呼びかけられ、あたしは背筋をピンと伸ばした。
「は、はいっ」
皇后様の顔にいつもの柔和な笑みはなく、かなり怖い。
「宮殿内で、許可なく魔法を使用してはなりません」
「治療目的でも、でしょうか」
重々しく告げられ、あたしは反射的に口ごたえしてしまった。しまったと思ったが、後の祭りだ。
逆らっても何の得にもならないのに、あたしったら馬鹿じゃないの!?
そんなあたしに、皇后様は厳しく言い重ねる。
「もちろんです。医務室など限られた場所以外では、使ってはなりません。大きな魔力が動けば、敵の攻撃を受けたのではと騎士達が誤解しかねないですからね」
そこまで考えが及んでいなかったあたしは驚いた。そりゃ皇后様が怒るわけだ。
「反省いたします」
これは心からの言葉だけど、守れるかどうかはあまり自信がない。もし必要だと感じたら、たとえ禁止されている場所でもあたしは使うと思う。目先の事にとらわれるのは間違った事だろうけど、あたしはそこまで大局を見ることは出来ない。
……多分、やってからまた悔やむんだろうけど。
「次からは、魔法を使う前にまず許可を得てください。そうすれば各所に連絡が行き届いて、無用な混乱を招く事もありませんから」
「はい。肝に命じます」
あたしの返事に満足したのか、皇后様は元の場所へ戻っていった。
するとクスクスという小さな笑い声が聞こえる。そちらに目を向ければ、ベルナデットが笑みを見せていた。
「申し訳ありません。つい」
あたしの視線に気付き、ベルナデットは謝罪する。
「ベルナデットの言葉の意味がよくわかりましたわ」
内心では彼女が笑顔を見せてくれた事に少しホッとしながらも、あたしは恨めしげに返した。
皇后様に怒られるという大失態は反省するが、おかげでベルナデットの気分が少しでも晴れたのなら、怒られ甲斐があったというものだ。
「ミシェイラ様のお顔を見る事が出来てよかった。アルフォート様に感謝しなくては」
その言葉に、あたしは首を傾げた。
「お聞きになっておられませんか？　お恥ずかしい話ですが、わたくしの屋敷で騒ぎがあり、宮殿へ避難して来たのです。心細いのでミシェイラ様にお会いしたいと訴えましたら、アルフォート様がその願いを叶えてくださいまして」
「そうだったのですか」
つまり、あたしは『ベルナデットを慰め隊』の隊員として連れて来られたって事？

でも、それならそうと最初から言ってくれればいいのに。変に隠されると、『実は他に理由があって、それを誤魔化すために、ベルナデットは嘘をついているんじゃないかしら？』なんて邪推してしまうじゃないか。

だけど、ベルナデットの憔悴ぶりを見るに、全部が嘘とも思えず疑問の域を出ないんだよね。

あたしはひとまず、当たり障りのなさそうな質問をしてみる事にした。

「お怪我はその時になさったのですか？」

「ええ。急いで避難する際に転んでしまいましたの。屋敷も一部が燃えてしまいましたし、当面はこちらで過ごす事になりそうですわ」

騒ぎって火事だったのか。

アルフォートは軍の指揮だけでなく帝都の治安維持や警備も担っていたはずなので、消火活動の指揮を執るために来たのかも。

だからあたしという邪魔な人間は、とりあえず宮殿で大人しくしていろってことか。何せあたしは水を出せても水鉄砲レベルだから消火活動の手助けは出来ないし、かといって屋敷に残しても護衛のために人員を割かれてしまう。

……こうして考えてみると、あたしは本当にダメダメだな。

皇后様まで忙しく動いているくらいだから、火事は今も広がっているのかもしれない。

「他にも、宮殿へ避難されている方々はいらっしゃるのですか？」

「他とは？」

「火事なら近隣の方々も一緒に避難されたのかと……違うのですか？」

「こちらへ避難してきたのはわたくしだけです。父は今も現場におりますし、近隣の方々はご親類を頼って方々へ避難されていると思いますわ。わたくしが宮殿へ避難いたしましたのは、こちらが最も近い『親類』だからなのです。父は皇帝陛下の実弟ですから」

「そうだったのですね。……という事は、ベルナデットはアルフォート様とは従兄妹の関係でいらっしゃるの？」

「はい。そのご縁で、幼少の頃より何かと親しくさせていただいておりますわ。だからこそ、今回の我侭も聞いていただけたのです」

そんな関係があったとは知らなかったなぁ。

情報をまとめると、火事が発生→アルフォートに緊急の呼び出し→ミシェイラを屋敷に置いといても邪魔→ベルナデットのお願い→ミシェイラを宮殿に送り込んじゃえば一石二鳥。こんな流れってことか。

筋は通っているが、非常に嘘臭い。

そもそも、本当にただの火事なのだろうか？　確かにここに来る途中で空が赤く染まっているのは見たけど、大して広範囲というわけでもなさそうだった。その程度の火事で、国家の中枢である皇族や宮殿の人々がここまで動揺するものなのか。

それに不安だからって、ベルナデットがあたしを連れて来るよう頼むとは思えない。あたしとベルナデットの付き合いはまだ浅く、そこまでベッタリな関係じゃない。第一、彼女は人を頼るタイ

プにも見えない。
あたしが何も知らない様子だったから、ひとまず何らかの理由がわかれば不安も減るだろうと、ベルナデットが『そういう事』にしたんじゃないだろうか？
精神的に参っている相手に気遣われるだなんて、申し訳ないやら情けないやらだ。せめて状況がもう少しわかっていれば、彼女に余計な気を使わせないで済んだのに。
やっぱり馬車に乗せられた時、何があったのかと問い詰めておけばよかった。
アルフォートめ！　なんで何も教えてくれないんだ!!
あたしはこの場にいないアルフォートへの怒りを強めた。

奥宮にある賓客用の小さな宮が、あたしとベルナデットに割り当てられた。
どうやら皇后様やリディアーヌも、近くで休むらしい。彼女達はお付きを従え、ゾロゾロと移動していった。
皇后様、皇太子妃、あたし、ベルナデットといった面々が一所に身を寄せ合い、外敵に対して身構えているイメージだ。これらの宮をまとめて囲えば、籠城戦だってできるだろう。
それは大げさだとしても、やはりワケありとしか思えない。
疲れきった様子のベルナデットと一緒に、あたしも今宵の宿となる宮へ向かう。護衛や侍女を引き連れているから、結構な団体行動だ。すれ違う人にとってはさぞかし邪魔で鬱陶しいことだろう。
それとも誰も一言も話さないから、不気味と感じるだろうか？

案内された宮には寝室が二つあり、それぞれにバスルームもあった。加えて共同の居間に、お付きの人達が待機するための小部屋がしっかりと設けられている。小さいとは言っても、日本の普通の一軒家の数倍はある豪奢な建物だ。
それをベルナデットと二人で使用するという事か。寝室が分かれているから、相部屋でもあんまり気を使うことはなさそうだ。
「ルーシー、わたくしの事はよいので、ベルナデットの手伝いをしてあげてください」
今、この部屋にはルーシー以外の侍女はいない。あたしとベルナデットのために一人で動き回っている彼女へ、あたしはそう声をかけた。
夜も遅いし、ベルナデットを一刻も早く寝かせてあげたかったからだ。
ベルナデットのガウンは煤けている上に、色々な汚れが付いている。彼女自身も、風呂に入った方がよさそうだ。
対してあたしは汚れてなんていないし、寝巻きに着替えるだけで十分。着替えだけならわざわざ手伝ってもらう必要はない。
ルーシーも同じ結論に達したのか、わかりましたと言ってくれた。
「身支度程度でしたら自分でも出来ますわ。無用なお気遣いはなさらないで」
ベルナデットはそう言ったが、その微笑みからいつもの元気は窺えない。
そんな人を、放っておけるわけないじゃないの！
「疲労のあまり、湯船で倒れてしまわれないか心配ですわ。ルーシーがそばにいればわたくしも安

心できます。だから、どうかわたくしの我侭を聞いてくださいませ。ね？」
「はい……では、お心遣いをありがたくお受けいたします」
そう言うと、ベルナデットはルーシーに付き添われて寝室に入っていった。
あたしも寝る準備を整えるため、もう片方の寝室へ向かう。
寝室は明かりが絞られていて薄暗かったが、物の判別はつく。寝巻きはどこだろうかと周りを見回し、ベッドの上に畳んで置かれているのを発見した。
手にとってみると、シルクのような素材で作られた薄手のネグリジェだった。
ゆったりとしていて、洒落た刺繍や可愛らしいフリルがあしらわれている。
ルーシーだったら、綿素材や飾りが全くない物を選んでくれているはずだから、おそらく宮殿の侍女が用意したものだろう。着慣れない感触に、ここはいつもの屋敷じゃないんだなと妙に実感した。
着替えると居間に戻り、とりあえず備え付けの椅子に腰掛けて二人が寝室から出てくるのを待つ。
しばらくするとサラサラという衣擦れの音と共に、ルーシーがベルナデット用の寝室から静かに出てきた。扉の開閉音もほとんどしなかったので、あやうく気付かない所だった。
布の塊を手にした彼女は、そのまま足早に通り過ぎていこうとしたが、出入口のところで立ち止まって振り返った。そしてようやくあたしに目を留めた。
「いらっしゃることに気付かず、失礼いたしました」
言いながら、歩み寄って来る。

「ベルナデットの様子はいかが？」
「湯をお使いになっていらっしゃいますわ。ところで、そちらは妃殿下の身につけておられたご衣装でしょうか？」
彼女の視線は、あたしの膝の上に向けられていた。
あたしは脱いだ服を畳んで膝の上に置いていたのだ。
「ええ。貴女の手が空いたら片付けていただこうと思いまして」
「お預かりいたします」
ルーシーは手を差し出しつつ言う。
「わたくしの事は後で良いのですよ」
そう言うと、ルーシーは手にしていた布の塊を軽く掲げた。
「ベルナデット様のご衣裳を洗い場へ運ぶついでなのです」
それなら一緒に持って行ってもらう方が、二度手間にならずに済むか。
「妃殿下、しばし起きておられるのでしたら、お茶をお淹れいたしましょうか？」
あたしは少し考えて答えた。
「わたくしは休みます。ベルナデットの事をお願いしますわね」
本当はベルナデットが風呂から出てくるのを待ってあげるべきなんだろうけど、そうするとルーシーは二人分の世話をしなくちゃならない。それにあたしが待っていたら、ベルナデットに余計な気を使わせてしまうかもしれない。総合的に判断して、今日のところは先に寝てしまった方がいい

んじゃないかと考えたのだ。
あたしは寝室に入り、明かりを消してベッドに横たわった。
目が冴えていて眠れそうにないが、寝ると言った以上、見た目だけでも寝ているようにしておかないとね。
目を閉じて耳を澄ますと、かすかに人が部屋に出入りしている音がする。ルーシーが細々とした用事を片付けているのだろう。
彼女が引き上げたら、ベルナデットの様子をこっそり見に行こうかな。
しかしいつまで経っても人の気配が絶えない。ベルナデットがとっくに風呂から出て休んでいるはずの時間帯になっても、まだ物音がしていた。

ルーシーが引き上げるのを待っているうちに、いつしか寝入っていたようだ。目が覚めたのは、普段通りの時刻だった。カーテンの隙間から、ほのかに光が差し込んでいる。
起きてから真っ先に思ったのは「ベルナデットの様子を見に行きそびれた」ということだった。次いで思ったのは、「ルーシーは大丈夫だろうか」ということだ。
あんなに遅くまで動き回っていたんじゃ、寝る時間なんてなかっただろう。それなのに、すでに扉の向こうで朝の準備をしている気配がある。もしや徹夜させてしまったんじゃないだろうか？
このまま寝たふりをしておくべきか、起きて行って朝の挨拶をするべきか。
でもあまり早いと、準備が終わっていなくて慌てさせてしまうかもしれないし。

う～ん、タイミングが難しい。もう少し待ってみようかな。
そう考え、ボーっと横たわっていることしばし。
カチャカチャという食器の音や、荷物を動かすような音が聞こえなくなるのを見計らって、ベッドから抜け出した。
室内履きを履いて、ベッドサイドに置かれていたガウンを羽織り、伸びをする。その時、タイミングよく寝室の扉が開かれた。
どうやらルーシーは衣擦れの音で、あたしが起きたことに気付いたようだ。
「おはようございます。昨夜は遅くなってしまいましたが、お身体の方はいかがですか？」
「おはよう。わたくしの体調に問題はありません」
「……本当ですか？」
ルーシーは疑わしそうに聞き直した。
夜更かししたくらいで体調なんて変わらないのに、どこまでダメな人認定されているんだろう？
ルーシーが淹れてくれたお茶を飲むと、そのあとは身支度。顔を洗われたり着替えさせられたり、流れ作業的に進んでいく。
もう毎朝の行事なので、余計な遠慮をする事もなく、全部お任せだ。あたしの朝は割と早い方なので、ベルナデットもまだ起きておらず、ルーシーはあたしの世話に掛かりっきり。
アレ？　今着せられている服って、屋敷でよく身につけている部屋着じゃないか。服だけじゃなく、愛用の日焼け止めまである。

「こちらは屋敷とは違い、日焼け防止用の結界がありませんから、念のため塗らせていただきます」
と言いながら、ルーシーが顔や首元など露出した部分に日焼け止めを塗り始める。
以前、アルフォートの領地に行った際、あたしは外に出ていないのに真っ赤に焼けてしまった。そこは日差しも強く、建物も窓が大きくて照り返しの強い材質で出来ていたのだ。その時、日光に対して無防備に肌をさらすのは恐ろしいと刷り込まれたあたしは、一も二もなく同意した。
「日焼けは危険ですものね」
この日焼け止めは、リオールからわざわざ取り寄せているものだ。服はたまたま似たものがあってもおかしくないが、日焼け止めは屋敷から届けられたものに違いない。
つまり、夜のうちに届けられたって事じゃないか。手回しが早すぎる。かなり遅くまで人が出入りしていたのは、身の回りの品を運び入れるためだったようだ。
それらが運び入れられたってことは、あたしもベルナデットに付き合ってしばらく宮殿暮らしになるのかな。こうやって自分の知らないところで何もかもが決定していくのは、あまり気分の良いものではない。
一晩たってつい忘れそうになっていたけど、結構な非常事態のはずなんだよね。それなのに相変わらずあたしは蚊帳の外に置かれている。いい加減腹が立ってきた。
「ルーシー」
あたしはルーシーへ声をかけた。

「アルフォート様に伝言をお願いしたいのです。『お時間が出来ましたら、お会いしたいです』と伝えていただけるかしら？」
「承ります」
「伝えていただいたら、その後は部屋に戻って休んでください」
ルーシーはあたしの言葉に眉をひそめた。
「なぜでしょう？」
「昨夜は遅くまで大変でしたでしょう？　今朝も早くから働いて、ほとんど眠れていないはずです。仮眠をとって、身体を休めてください」
むしろ徹夜したでしょうと言いたい。そうでなくとも、十分に休めと言っていいレベルのはずだ。
「……お言葉に甘えさせていただきます」
逡巡した後、ルーシーは頷いてくれた。

ただひたすら待つというのは、とても疲れるものだ。
ベルナデットが起きてくる気配はなく、アルフォートが顔を見せる様子もないまま、あたしはお昼までぼんやりと過ごしたのだ。
屋敷から届けられた荷物の中に本があったようで、名前も知らない宮殿の侍女さんが暇つぶしに、と持ってきてくれたけど、目を通す気にはなれなかった。
どうにも気分が落ち着かない。何かとんでもないことが進行しているような気がするのに、何も

わからないから不安だけが募る。
本当は散歩でもしたいが、外に出るわけにはいかない。せめて外の景色を眺めていれば少しは気分が落ち着く気がして、あたしは窓際に立った。
武装した二人の兵士が、窓の近くを通りかかった。警備を交代して戻っているところなのか、どこか気楽な雰囲気だ。
『やっぱりサタレンの仕業らしいな』
『ここのところ戒厳令が布かれていたからいつか来るとは思ってたが、よりにもよってこんな手段をとるとは』
『今回の件で、陛下も本気になられたらしいぞ』
『これでサタレンから受けるちょっかいも減り、少しはスッキリするんじゃないか？』
『被害は少なくて済むといいな』
『そうなるように俺達が頑張るっきゃないだろうよ』
二人組はそんなことを語りながら通り過ぎて行った。
あたしには彼等が何の事について話しているのかサッパリだ。だけど、今起きていることについて語っていたのは理解した。
やはり単なる火事ではなかったようだ。サタレンという人だか国だかが、テロ活動かそれに準じた行動を起こしたらしい。ずいぶんときな臭いことになっているようだ。
他にも何か聞けないかなと、窓際に張り付いて通りかかる人の声に耳を澄ましてみたが、それ以

上の話は聞けなかった。
アルフォートが顔を見せるのとベルナデットが起きるのと、どちらが先かと思っていたら、その前にルーシーが起きてきた。
一向に姿を見せないアルフォートに腹立たしさは覚えるが、それよりも問題なのはベルナデットだ。
もうお昼なのに、ちょっと遅すぎるんじゃないだろうか？　好きなだけ寝かせておこうとは思っていたものの、そろそろ起こした方が良いかもしれない。
ルーシーや他の侍女さん達も、彼女が眠っている寝室の扉をチラチラと見ているので、やはり気になっているようだ。
「ルーシー、ベルナデットの様子を見てきてくださる？」
自分で動きたいけど、そうすると侍女さん達の面目を潰してしまいかねない。だからルーシーに頼んだ。
彼女はベルナデットの寝室に入って行き、程なくして出てきた。だが、その表情は浮かない。
「体調を崩されているようです。お医者様を呼んで参ります」
「どんな様子なのです？」
あたしはルーシーの言葉に驚き、訊ねた。
「熱があるようで、うなされておられます」
「熱は高いのですか？」

「いいえ。それほどではございません。昨夜の騒ぎで、一時的に体調を崩しておられるのではないでしょうか。熱冷ましの薬を呑んで安静になさっていれば、じきに快復されると思うのですが、わたくしに判断できることではありませんので、お医者様に診察していただこうと考えております」
ルーシーの説明を聞いてそれほど深刻な状態ではなさそうだとわかり、あたしは安堵した。
「ではその通りにしてください」
部屋を出て行くルーシーを見送ると、あたしはベルナデットのもとに向かった。
ベルナデットは眉間に皺を寄せて眠っていた。あたしがおでこに触れても全く反応はない。
ルーシーの言葉通り、熱はそれほど高くないようだ。少し熱いかな、という程度だ。
だが目尻に残る涙の跡や、腫れぼったい目蓋から、精神的に消耗しているのが見てとれる。多分、部屋で一人になった後、コッソリ泣いていたのだろう。
憔悴していることはわかっていたけれど、そんなに苦しんでいたなんて気付けなかった。あたしはなんて情けないのだろう。
侍女さんの一人が洗面器のようなものを持って来てベッドサイドのテーブルに置き、濡らした布を固く絞ってベルナデットの目元に宛がった。
あたしは邪魔にならないようベッド脇のイスに腰掛け、彼女達の働きを見守る。
しばらくすると、ルーシーが医師を伴い戻ってきた。診察した医師は、ルーシーの見立てと同じ内容を口にした。
医師が処方した薬は解熱剤のみ。気持ちが昂ってどうしようもなくなったら、その時は精神安定剤を処方してくれるそうだ。
ベルナデットは病気の時、一人になりたい人なのか、人恋しくなる人なのか、あたしは知らない。けれど、昨夜は心細かったと口にしていた。なので、あたしは彼女のそばに付いていることにした。
枕元に座って本を読み、ただ目覚めるのを待つ。こんなことでベルナデットの気持ちが楽になるとは思っていないけど、目覚めた時に少しでも安心してもらえたらいいと思う。あたしに出来るのはこのぐらいだし、出来る事はしてあげたかった。
それにしても、ベルナデットがこんな状態になるなんて、本当に何があったんだろうか？　知りたくもあり、知るのが怖くもあった。

ベルナデットは、程なく目を覚ました。
「ミシェイラ様？　……ご心配をおかけしたようですね」
枕元のあたしを見て不思議そうにした後、彼女は額に載っている布に気付いてそう言った。
気が張っているのか強がっているのか、寝起きのはずなのに話し方はハキハキしている。もし熱があると知らなければ、病人とは思えない振る舞いだ。
「お水はいかが？」
「いえ……」
「お水よりも、お茶の方がよろしいかしら？　それとも果実を搾ったものの方がお好み？」
あたしは畳み掛けるように聞いた。

昨夜から水分を摂っていない上に寝汗をかいているのだ。喉が渇いていないはずがない。それなのに要らないというのは、遠慮しているか、身体の渇きにも気付かないほど動揺しているかどちらかだと思う。

遠慮なんてさせません。少々強引にでも、水を飲ませてやる。お茶や果汁を引き合いに出せばもっと遠慮するだろうし、それぐらいなら水を飲んでやろうという気になる……はずだ。

「では、水を」

仕方ないなといった様子だけど、彼女は水を飲むことを了承してくれた。

あたしは上手く誘導できたことに思わずほくそ笑みそうになったが、すぐに表情を引き締める。

壁際に控えていた侍女さんが歩み寄ってきて、ベルナデットの身を起こした。ふらつく身体を支えて背中にクッションをあてがい、薄手のストールをかける。

素晴らしい手際で、あたしの出る幕など全くなかった。中途半端に差し出した自分の手が、非常に虚しい。

それならと、あたしはサイドテーブルにある水差しからコップに水を注ぐ——前に、ルーシーが水の入ったコップをあたしの目の前に差し出していた。なんたる早業。

コップを持つルーシーを見上げると、無言で促された。

あたしはコップを受け取り、ベルナデットに差し出す。

別にあたしを中継する必要などないのに、ルーシーは「妃殿下」に花を持たせてくれたようだ。

ベルナデットは気だるげにコップに口をつけ、そこで初めて喉の渇きを自覚したのか、一気に飲

み干した。
「おかわりはいかが？」
「いただきます」
ベルナデットからコップを受け取り傍らに立つルーシーを見上げれば、彼女は手に水差しを持ち待機していた。……病人だけじゃなく介護者の介助までしなきゃならないなんて、侍女さんって大変だね。
水がなみなみと注がれたコップを渡され、再びベルナデットに差し出す。
彼女はそれを先程より時間をかけて飲み干していった。
飲みきった後、ベルナデットはホウッと息をついた。少しは落ち着いただろうか？
「医師から、熱を下げる薬を処方されています。薬を飲む前に、少しでも胃に何か入れた方が良いのですが、食べられそうですか？」
あたしはベルナデットからコップを受け取りながらそう訊ねる。
「いいえ……」
ベルナデットは力なく首を振った。
「普通の食事が無理なら、口当たりの良い果物でもお菓子でも良いのです」
要らないと言われる事は予想していたから、あたしの口からスルスルと代案が出てくる。
「ミシェイラ様のお食事はお済みですか？　それと、今は何時くらいなのでしょう？」
「昼は過ぎていますが、午後のお茶には少々早いくらいです。ベルナデットが遅めの昼食を摂られるのでしたら、わたくしも軽くつまもうかと考えております」
「もうそのような時間なのですね。すっかり寝入ってしまっていたようで、お恥ずかしいです」
「体調が優れないのですから仕方ありませんわ。昨夜から何も口にされていないので、胃は空でしょう。このままお薬を呑まれては、胃が荒れてしまいます。ほんの少しでも……スープだけでも召し上がりませんか？」
あたしがしつこく食い下がると、ベルナデットは逡巡した。
「あまり、食欲は……」
その時、どこからかキュルルという音がし、ベルナデットの言葉が途切れた。
あたしは部屋の中に視線を彷徨わせる。しかしごく短い音だったので、音源を特定するには至らなかった。
何だったのだろうと思いながらベルナデットに視線を戻すと、彼女が顔を赤らめ俯いていた。
再びキュルルという音が響く。
……何とそれは、ベルナデットのお腹の音だったのだ。
食事の話題に身体が反応して、空腹を訴え始めたのだろう。身体の方はまだ元気である証拠。食欲があるのなら大丈夫だと、あたしは安堵した。怖いのは食欲がなくなってからだと、あたしは経験上知っている。
そんなあたしの気持ちなど知る由もなく、ベルナデットは恥ずかしそうに食事を摂ることを了承した。

すると、すかさずルーシーが言う。
「わたくしはベルナデット様のお食事と、妃殿下の軽食の用意をしてまいります」
「ええ、お願いいたしますわ」
お茶は何にするかなど、いくつかの希望を彼女に伝えていたら、ベルナデットは一人でベッドから抜け出してしまっていた。
「まだ横になっていなければ」
あたしは慌てて止めたが、首を横に振られた。
「それほど心配なさる必要はございません。瀕死の重病人ではないのですから、席について食事を摂ることくらい出来ますわ」
そう主張するだけあって、確かに彼女の足取りはしっかりしている。
となると強固に反対する理由を見いだせず、あたしは折れた。
「食事のあとに薬を呑まれたら、必ずベッドに戻ってくださいね」
「はい」
仕方ないと頷きつつもあたしが釘を刺すと、ベルナデットは素直に返事をした。
食事中は当たり障りのない話をした。経済がどうとか、景気がどうとか、難民がどうとか、あたしには難しすぎて半分以上聞き役になった。
話をしている時、ベルナデットは体調不良や精神的なショックがある事をまったく感じさせなかった。

そう見せないようにしているんだとは思うけど、すごい精神力だ。
そんな感じで、ベルナデットは用意された食事の大半を胃に収めた。今のところはまだ食べられているので、それほど心配は要らないのかもしれない。
食後に薬が出されると、ベルナデットはそれはそれは不味そうに、顔をしかめて呑んだ。
「わたくし、この苦味だけは駄目なのです」
「本当に苦いですからねぇ」
同感だ。あたしだって、呑まずに済むなら一生呑みたくない。
「ええ。どうして薬はどれもこのように苦いのでしょうね。もっと口当たりの良いものがあってもよろしいではありませんか」
可愛らしく口を尖らせて言うベルナデットに、あたしはその理由を教えてあげた。
「ニガという実が入っているからですね」
「そうなのですか？」
「薬を呑むとどうしても胃が荒れてしまいますので、それを軽減させるためにニガが使われるのです。薬の苦さは、ほぼそのニガの実のせいですよ」
リオールの王家専属医であるグラントから聞きかじった知識。それを披露するあたしの言葉に、ベルナデットは興味深げに耳を傾けてくれた。
そういえば元の世界でも、処方される胃薬ってすごく呑みにくかった。世界が変わっても胃薬が苦いって、すごく不思議だ。

その時あたしの前に、そっと小さな包みが置かれた。
なにこれ？　と、それを置いた人――ルーシーを見上げた。
「こちらは妃殿下の分のお薬です」
「ミシェイラ様も体調を崩しておいでなのですか」
ベルナデットが驚いた顔をする。
イヤイヤ、そんなことは全くありませんよ。
「わたくしは何ともありません」
「ですが……」
慌てて否定したが、ベルナデットは信じない。
どういうことだと、あたしは再びルーシーを見やる。
「こちらは胃薬と消化剤でございます。食べすぎでお苦しいのでしょう？　このままですと、腹痛を起こされます」
ルーシーは淡々と説明してくれた。
「ミシェイラ様は、それほど召し上がっていましたか？」
ベルナデットが小首を傾げる。
「ご昼食から間が空いておりませんし、常よりも多く召し上がられました。先程より、さりげなくお腹をさすっておられましたので、お苦しいのかと」
あたしはそう指摘され、無意識にお腹をなでていた手をどけた。

ベルナデットはルーシーの説明に頷き、ダメな子を見るような生暖かい眼差しを向けてくる。
「ミシェイラ様、わたくしの食事に付き合うために、そのような無理をなさってはなりませんわ。ご心配をおかけしたわたくしが申すべきことではありませんが、周りをヤキモキさせてしまいます」
「はい……」
もっともすぎることを言われ、あたしは項垂れた。
確かに食べすぎで、後で胃が痛くなるだろうな～と覚悟していた。わかっていたのに何で食べたのか。それは目の前で美味しく食事をしていれば、ベルナデットも釣られて食べてくれるかなと思ったからだ。
もっと食べろと言われても食欲はなくなるだけと、身をもって知っている。自然に食事を促そうと考えたら、他に良い手段が思い浮かばなかったんだ。
……って、これは母と全く同じ手段だなと、今になって気付く。
そうか～、母さんがあたしを連れ出してわざと目の前で食べてみせたのは、そういう親心だったんだ。今まで気付かなかった事もだけど、あの非常識な母と同じ発想をしたなんて……いろんな意味で凹むなぁ。
食事を終えると、ベルナデットは寝室に戻って再び眠りについた。元気に見えてもまだ熱があるので、安静にしていなくてはいけないとの事だ。

あたしもまた彼女の枕元に陣取って、のんびり読書をした。
もちろん、何が起こっているのか聞きたいという気持ちはある。何もわからない事による不安は、未だにとても大きい。だけど、そんな気持ちをベルナデットに押し付けるべきじゃない。何より、病人に無理をさせるなんて言語道断。そう思ったから、あたしはそれらの言葉を呑み込んだのだ。
それにしても、なんでこんな事になってしまったのだろう。そもそも、今の状況を予感させるような予兆なんてあっただろうか？　あたしは昨日の出来事を思い浮かべた。

昨日は朝食の後、日傘を差して庭園に出た。それがここしばらくの日課となっていたのだ。
庭園で何をしているのかといえば、植木への水遣りだ。お妃様らしくないが、あたしは植木鉢に薬木の苗木を植えて、個人的に育てているのだ。別にその木を使って誰かを毒殺しようだとか、逆に薬にしようなんてことは全く考えていない。
日中は、せいぜいアルフォートのお出かけに付き合うくらいでさほどやる事もなく、暇を持て余している。だから植木の世話はよい気分転換になるし、何より魔法の練習にもなっている。
水遣りには道具を使わず、水鉄砲レベルの残念な魔法で、ひたすら水をかけているのだ。
やり始めたばかりの頃はうまく水をかけられなかったけど、続けているうちに狙いを外すことは少なくなったし、心なしか水鉄砲の威力が増したような気もする。
魔法が上達するという事は、すなわち魔力の扱いも上達しているということ。いずれ元の世界へ帰る時に、魔力の扱いが上手くなっていれば何かと役に立つに違いない。そう考えると、やる気も

出ようというものだ。そんなわけで、あたしはそこそこ楽しんでやっていた。
フンフンフ～ンと鼻歌交じりに水遣りをしていたら、そこにアルフォートがやって来た。
朝日に金髪がきらめいて、いつも以上に眩しかった。
彼――アルフォートというサフラスタン帝国の第三皇子は、とんでもなく良い見てくれをしている。平凡顔のあたしが横にいるのが申し訳なくなるほど、キラキラした皇子様だ。
ちなみにキラキラしているというのは比喩ではない。後光が差しているのかと思われるほど無駄に輝く金髪を持っているのだ。更に青い目に褐色の肌、引き締まった肉体、高い身長、と嫌味なほど好条件が積み重なれば、そりゃ女性は誰しも虜になるだろう。
ああ、刺々しい言葉が交ざってしまうのは申し訳ない。これは八つ当たりだ。彼は非の打ちどころがなさすぎて、こうやって言いがかりのように貶すことしか出来ないのだ。
あたしは最初、そのチャラチャラした見た目から、大量の愛人がいるに違いないと思った。むしろそうあってくれと期待した。それなのに、そんな影はついぞ見当たらない。せいぜい、陰からこっそりお慕いしています系の女の子が憑いている程度だ。
愛人志願者は量産され続けているが、彼女達はアルフォートにとってあまり好ましい相手ではないらしく、妻であるあたしを出汁にして逃げ回っている。
おかげでこちらは灰汁の強い愛人志願者達の集中砲火をたびたび受けるはめになって、大迷惑だっての。内心で罵倒するくらいは許されるだろう。
悪意ある見方をしてしまうのは、嫌な奴だと思っていたいという意識からでもある。嫌な奴なら、

多少の迷惑をかけても――勝手に元の世界に帰っても――心を痛めなくて済むじゃないか。
アルフォートは表面上は人当たりがよいが、実は相手に感情を全く見せないガードの固い人だ。穏やかな笑みの裏で何を考えているかわからないので、どう接したらいいものか未だに答えが出ていない。
思わぬ登場に対する戸惑いを見せないようにしつつ、あたしは彼を眺めた。基本的に用件がなければ彼の方から近づいてくることはない。一体何の用だろうか。
その視線に気付いたのか、アルフォートがニッコリと笑った。あたしもつられてヘラリと笑ってしまう。
「おはようございます。気持ちのよい朝ですね」
爽やかに挨拶され、本当にそうですねと返した。
「その植木が、例の品ですね」
彼はあたしの目の前の植木鉢を見て言う。
実は、この薬木は屋敷の料理長が植木屋さんから仕入れて育てていたものだ。料理長は屋敷内に専用のハーブ園を持っている。その中に、食用に適さないこの薬木が紛れ込んでいたのだ。料理長が気付いて処分しようとしていたのを、あたしが貰い受けた――という事になっている。表向きは。
料理長が仕入れたハーブの苗木に、くだんの薬木が紛れていたところまでは合っている。だが、料理長は気付いておらず、あたしが散歩中にたまたま見つけたのだ。各種薬物や毒物の勉強をしていたので、その知識が役に立ったわけだ。

うろ覚えな記憶では、この薬木はかぶれなどの治療に適しているけれど食用には向かず、誤って口に入れるとひどい食中りを起こすと本に書かれていた。
見つけた時点ではあまり自信がなかったけれど、かといって人の口に入ってからでは遅いので、料理長におねだりして譲ってもらったのだ。理由を話すと料理長が恐縮すると思ったので個人的な我侭ってことにしといたんだけど、後でアルフォートの側近であるジュールに追及されて、実は……と白状した。そして、『料理長のミスなのだからちゃんと報告しろ』と軽く怒られた。
要するに、あたしにとっては因縁の鉢植えだ。
だからこそ、アルフォートから「例の」という言葉が出てくるのだ。
「ええ。水遣りを欠かしていませんし、気候も合っているのか、順調に育っていますわ」
「それは良かった」
彼は笑いながら頷くと、背中に隠していた手をあたしの前に差し出してきた。
手の上に乗っていたのは、美しい装飾が施された如雨露。あたしはポカンとした。
だって、皇子様が如雨露って！　全く似合わない組み合わせだよ。
「……もしやわたくしにくださるのですか？」
ようやく気付いて訊ねると、アルフォートは答えた。
「はい。魔法を使っての水遣りは大変でしょうから」
正直、余計な事をと思った。だけどせっかくの厚意を無下にすることなんて出来ない。
受け取ろうと手を伸ばしたんだけど、アルフォートがそれを押し止めた。

「これは呪文を唱えると水が出てくるようになっています」
そう言って、彼は実際に呪文を唱えてみせた。
なんと、みるみるうちに、水が如雨露いっぱいに溜まっていくではないか！
蛇口と配水管なしで水を補給できるなんて、すごすぎる!!
「まあ！　すごいですわ！」
思わず感嘆の声を上げてしまったが、こんな物を見せられたら、誰だってそうするに違いない。
触ってみたいと思っていたら、その気持ちを察したのか、アルフォートは如雨露を渡してくれた。
「どうぞ、使ってみてください」
あたしは嬉々として、さっきの彼と同じように呪文を唱えた。
すると――
如雨露からものすごい勢いで水が噴出して、あたしとアルフォートに降りかかった。
すぐに水は止んだが、あたし達は二人ともずぶ濡れだ。珍しいことに、アルフォートが驚いて目をパチクリとさせている。
あたしは唖然として言葉も出なかったけれど、すぐに笑いが込み上げてきた。
「あ、アハハハハ！　ビックリしました。……クフ。フフフフ。おっかしいですわ」
あたしが思わず噴き出してしまうと、アルフォートも声こそ上げはしなかったが静かに笑った。
「魔力を込めすぎたのですね。少しの魔力で動かせますよ」
前髪から水を滴らせ、笑いをかみ殺しながら彼は言った。

立ち読みサンプルはここまで

「それほど魔力を込めたつもりはなかったのですが……こうかしら？」
あたしはもう一度呪文を唱えてみた。
今度は意識して魔力を絞ったのだが、先程よりはだいぶ威力は抑えられたものの、やっぱり水が噴出した。
「まだ強いようですね」
「う～ん、こうでしょうか？」
更に魔力を絞って呪文を唱える。
今度は如雨露から少し水が溢れるくらいで済んだ。
「やった！　上手くいきましたわ」
そう言っている間にも気を抜くと水が増えてしまうので、あたしは慌てて集中した。
そして水が溢れないよう慎重に如雨露を傾ける。
すると如雨露の先端から霧雨のような水が出て、薬木に降りかかった。
ちゃんと出来た！
あたしの実力では魔具ひとつ使うのも、かなり大変だとわかった。だがやりきった感が満載で、とても清々しい。
もしかしたら、いつもの水鉄砲よりも、こっちの方が良い練習になるんじゃないか？
うん、いい物をもらった。
こんな風に細やかな気配りが出来る人を、いつまでも嫌な奴だと思い続けられるものじゃない。